

これでなっとく金融調節 第3回

2020年10月28日

全3頁

準備預金制度と日本銀行当座預金

オールド・ノーマルの金融調節②

金融調査部 研究員 中村文香

「これでなっとく金融調節」第3回は、前回に引き続き、「オールド・ノーマル」の金融調節について解説します。今回は準備預金制度についてです。

日銀当預の総量を1カ月単位でコントロールする「準備預金制度」

「これでなっとく金融調節」第2回では、日本銀行（日銀）が、日々の金融調節を通じて「日本銀行当座預金（日銀当預）に預け入れられているお金の総量＝金融機関相互の支払いに利用できるお金の総量」をコントロールしていることをお話ししました。前回ご紹介したのは、日々の金融調節でした。今回は、1カ月単位で日銀当預の総量の調節を行う「準備預金制度」について解説します。

「準備預金」とはなにか

「準備預金」とは、もともとは不測の支払いや預金の引出しに備えるために用意しておくお金のことでした。急に多額の預金の引出しに応じなくてはならなくなり、支払いが滞ってしまうと、銀行は信頼を失ってしまいます。そんなことにならないよう、常に一定以上のお金を準備しておくのです。支払いのための最低限の備えとして誕生した準備預金制度ですが、様々な役割を果たすようになりました。

第一に、預金の一定割合を準備金として日銀に預け入れさせることで、銀行の信用創造に影響を与え、無限にお金（預金）が増えないようにします。第2回でお話したように、銀行は理論上、お金を借りたいという人がいる限り、無限にお金を貸すことができますが、準備預金制度によって、増えたお金の一部を日銀に預け入れさせるようにすれば、お金の増加に歯止めをかけることができます。例えば、100万円の預金があり、10%を準備預金として日銀当預に預けなくてはならないとすると、貸出に使えるのは90万円です。A銀行が貸出した90万円を受け入れたB銀行は、9万円を日銀当預に預け、81万円を貸出します。同じ作業を繰り返すと、最終的に預金総額は1,000万円となり、最初の100万円の預金から貸出せるのは、最大で900万円になります。

第二に、預金のうちどのくらいの割合を準備預金として預け入れさせるかで、銀行の貸出の量に影響を与えることができます。この割合を「準備率」といい、準備率を変化させることによって、お金の増え方をコントロールすることができます。例えば、準備率を10%から15%に引き上げれば、貸出などに使えるお金の量は減ります。準備率を変化させることによる金融調節は、先進国では最近では使われていませんが、新興国では今なお最も重要な金融調節の手段です。

準備預金の積み上げと金利

1カ月を通じて、準備預金がどのようなペースで積み上げられていくかは、銀行間でのお金の貸し借りの金利に影響を与えます。日銀は、準備預金の預け入れの状態を操作することで、金利のコントロールを行います。以下ではその仕組みを詳しくみてみましょう。

A銀行が日銀当預に預けなくてはいけない準備預金の額が一日当たり100万円だったとします。A銀行は一定の期間に、平均して100万円を日銀当預に入れ続けなくてはなりません。準備預金を預け入れる期間のことを「積み期」といいます。今回は1カ月(30日)の積み期を例に考えてみましょう。

目標を達成するには、日々の残高を合計した累積残高が、30日目に3,000万円になっていればよいこととなります。貸出をすれば利益が出る状況なのに、利息の付かない日銀当預にお金を預けておくのは、利益を得るチャンスを失っていることとなります。ですから、A銀行としては、1カ月の累積残高がぴったり3,000万円になるように積立を行っていきます。しかし、もし目標を達成できなければ、ペナルティとして追加のお金を日銀当預に入れなくてはなりません。ペナルティを受けてしまうと、その分貸出に使えるお金は減りますし、銀行の信用も失われてしまうので、何としてでも目標額は達成しなくてはなりません。ですから、仮に、29日目までの積み上げが予定通りにいかなかった場合、最終日にはどんなに高い金利を払ってもお金を借りてきて積立を行う必要があります。積み期はすべての銀行で同じ期間なので、他の銀行も積み上げが足りていない場合、金利は大きく上昇することとなります。

日銀は、積み期の間どのような姿勢を取るか、基本方針を決めています。市場参加者はその方針を予想し、積み期に金利が上昇するか、低下するかの予想に基づいて、早めに積み上げを行ったり、逆に積み遅らせたりします。積み期間中に金利が上昇すると予想している参加者が多い場合、現時点で金利が上昇しやすくなります。この際、日銀がお金を銀行に貸せば、金利の上昇を抑えて緩和的にすることができますし、あえて何もしなければ、金利を引き上げることができます。日銀がどのようなオペレーションを行うか、あるいは行わないかが、日銀のスタンスを市場に対して発するシグナルとなります。

以上が金利を操作する仕組みです。操作の仕組み自体は簡単なものですが、日銀がどのタイミングで、どのようなオペレーションを行うかによって、市場参加者は日銀のスタンスを見極め、自身の行動を変えます。オペレーションのほんの少しの違いに、日銀の政策意図が反映されているということとなります。現在、日銀は様々な方法で市場と対話を行っていますが、金融調節

は金融機関に直接影響を与えるツールであるため、金融調節から読み取ることのできるシグナルは大変重要です。

今回は日銀当預全体の量の調節についてお話ししました。日銀当預の総量が十分であっても、個別の金融機関の資金の過不足まではコントロールができません。そうした場合には、個別の金融機関を相手に資金の貸出などの「オペレーション」を行う必要が出てきます。次回は個別の金融機関に対するオペレーションについて解説します。

以上